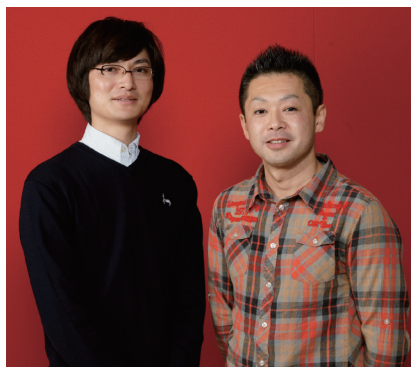


Sony Music Communications

ソニーには、グループ同士がコラボレーションして誕生した製品やコンテンツ、サービスがたくさんあります。そのコラボの数々を、毎回1つずつピックアップして紹介します。



写真左
ソニーエンジニアリング
設計2部
松尾 伴大さん



インナーイヤーマニター
『MDR-EX800ST』

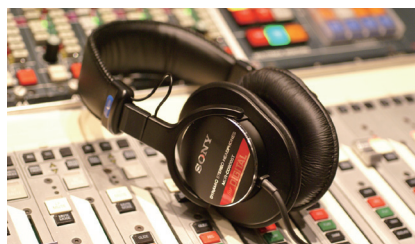
2010年10月18日発売

写真右
ソニー・ミュージック コミュニケーションズ
スタジオ&ネットワークカンパニー スタジオオフィス
レコーディング・ルーム レコーディングエンジニア
篠筈 孝さん

違う方法で音を作り込むエンジニアたちのこだわりが形になったプロ仕様のヘッドホン

ソニーとソニー・ミュージックコミュニケーションズ (SMC)、両社のノウハウを注ぎ込んだインナーイヤーマニター「MDR-EX800ST」は、レコーディングスタジオやライブステージなどの“音の現場”でアーティストたちが使用するためのヘッドホンだ。高音質だけでなく、プロの現場ならではのハードなパフォーマンスにも耐えられる。「1990年に発売され、未だ現役の『MDR-CD900ST』のようなスタンダードをインナーイヤーマニターでつくろうとSMCに提案したのが共同開発のきっかけでした」と語るのは、設計担当の松尾さん。「MDR-CD900ST」は国内外からプロ仕様のヘッドホンが続々と登場する今でも高評価を得るオーバーヘッド型のモニターだ。

松尾さんのパートナーとなったのは、レコーディング現場で活躍する篠筈さん。ヘッドホンづくりのプロである松尾さんが試作品を持ち込み、音づくりのプロである篠筈さんがその音を検証。修正点を持ち帰り、また試作品をつくり直す。



今回の開発のきっかけとなった「MDR-CD900ST」。

妥協を許さぬ地道な作業が繰り返された。「私たちレコーディングエンジニアは、チューニングされたスタジオのスピーカーで音を操作します。また、アーティストにもできるだけスピーカーと同じ音をモニターしてほしい。だからスタジオのスピーカーと松尾さんが用意するヘッドホンからの音を聴き比べ、できるだけ色づけされていないバランスの良い特性になるようアドバイスしました。何度もつくり直してきてくれる松尾さんの根気強さに、プロの気概を感じましたね」(篠筈さん)。「製品化へ向けて材料を変更すると、また音が変わってしまう。理想の音を再現するための構造づくりには苦労しました。篠筈さんはモニターからの音楽を聴いただけで、音の特性を細かい数値まで言い当ててしまう。測定器のように音を聴き分ける能力は、驚かされると同時に音づくりに迷った時の何よりの道しるべになりました」(松尾さん)。

量産のための最終的な試作の段階に入っても満足いく音まで一步届かない。そんな時に松尾さんの背中を強く押してくれたのが、「この部分さえ直れば、歴史に残る製品になりますよ」という篠筈さんの励ましの言葉、そして、かつてあの「MDR-CD900ST」の開発に携わった上司からのアドバイスだった。「さまざまな試みが手詰まりになってしまった時、長年ヘッドホンをつくってき



スタジオ上部のラージスピーカーから聞こえる音とヘッドホンから聞こえる音を聴き比べながら、調整を重ねた。

た上司が『こんな可能性もあるのでは?』と提案してくれて突破口が見えた。今回の共同開発を含め、ソニーだからこそ生み出せた製品だと思います」(松尾さん)。

篠筈さんも「自分のやってきたことが違う形で生かされたことはうれしい。機会があればまたモノづくりに関わってみたいですね」と語った。こうして完成した「MDR-EX800ST」は、これから数多くのアーティストたちの音づくりを支えていくに違いない。